

平成22年6月15日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19700572

研究課題名（和文） 介護によって家族を看取ることによる生涯発達  
－「ケアすること」の両面的側面－研究課題名（英文） Life-span Development by Taking Care of Family by Nursing  
Both Value Side of "Care"

研究代表者

渡邊 照美（WATANABE TERUMI）

くらしき作陽大学・子ども教育学部・講師

研究者番号：60441466

研究成果の概要（和文）：愛する人を喪う死別経験，身近な他者の介護をしながら老いを目の当たりにし看取るといった経験は，やはり耐え難い経験である。その否定的な側面を十分に認め，それぞれの経験には多様性があること，そして一人の同じ人間であっても，時間や環境，当事者の心身の健康状態等によって，喪失経験後の受け止め方に変化が生じるということを理解しなければいけないことが示された。その上で，介護や死の看取りを経験することが，我々に生きるということを教えてくれると同時に，他者の危機を支えることで，自己の心にも成熟をもたらす可能性があり，ケアすることが意義あることであるという提案がなされた。

研究成果の概要（英文）：The experience of mourning bereaved experiencing the person who loves, witnessing aging while nursing familiar others, and taking care is a still unbearable experience. It was shown for diversity to exist in each experience admitting the negative side enough, and to have to understand the change took place and in how after the loss had been experienced by time, environment, and person concerned's mind and bodies' health conditions etc. if it was the same as much as one man to catch it. The proposal whose others' crises were supported at the same time as teaching taking care of nursing and the death to be effective in us the experience on that, there was a possibility to bring maturity also in own mind, and there is a meaning caring what was performed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	420,000	2,720,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：介護，生涯発達，ケア，家族，死別，人間的成長，人格発達

## 1. 研究開始当初の背景

生涯発達において，家族のケアの経験は重

要な人格的変容をもたらす契機となる。しかし，高齢者介護や子育てといった「ケアする

こと」は、非常に重要かつ今日の問題であるにも関わらず、「ケアすること」に対して、正当な評価が与えられることは少ない。高齢者虐待や乳幼児虐待がクローズアップされるばかりで「ケアすること」はネガティブな仕事として見なされがちである。

しかし『On Caring』(Mayeroff, 1971)や『Caring』(Noddings, 1984)のように「ケアすること」のポジティブな意味を提示した研究、書籍もあり、また育児経験者、介護経験者の手記や日常会話等の日常レベルにおいても、ケアすることによるポジティブな変化は読み取れる。本邦においても「ケアすること」によるケアする側のポジティブな側面の発達に関する研究が、高齢者介護や育児を中心に行われ、価値ある知見が提出されている(例えば、石井, 2003; 柏木・若松, 1994)。

本課題申請者は、これまで近親者をがんで亡くされた方を対象に、生涯発達の視点から、死別経験という喪失の意義、ケアすることのポジティブな変化を量的側面(渡邊・岡本, 2005)とナラティブアプローチによる質的側面の双方から検討(渡邊・岡本, 2006)してきた。具体的な発達変容としては、自己感覚が拡大・深化し、生と死についても深い模索が認められた。またケアの量と共に、ケアの質についても分析し、日常生活を維持するためのケア、こころのケア、その人の人生を完成させるために必要なケアの3つのケアを、必要な時期に行うことが、ケアする側にとって、ケアすることの意義を見いだせる重要な要因であることも明らかになった。以上より、近親者に対する看取りのケア(発病時もしくはケアが必要になった時から死までのケア)をすることと、看取る側、つまりケアする側の成長・発達には関連があることを明らかにした。

#### 【引用文献】

石井京子 2003 高齢者への家族介護に関する心理学的研究 風間書房.

柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み— 発達心理学研究, 5, 72-83.

Mayeroff, M. 1971 *On caring*. New York : Harper & Row.

Noddings, N. 1984 *Caring : a feminine approach to ethics & moral education*. California : University of California Press.

渡邊照美・岡本祐子 2005 死別経験による人格的発達とケア体験との関連 発達心理学研究, 16, 247-256.

渡邊照美・岡本祐子 2006 身近な他者との死別を通じた人格的発達—ガんで近親者を亡くされた方への面接調査から—死別

経験による人格的発達とケア体験との関連— 質的心理学研究, 5, 99-120.

## 2. 研究の目的

身近な他者との死別や介護といった経験は、ネガティブな経験として捉えられがちである。そのような中で、ネガティブな経験からいかに回復し、さらにそれまで以前よりも成熟する可能性が研究でも示されるようになった。

そのため、まずは文献調査により、現在までの知見を整理することを目的とした。次に、その知見を踏まえた上で、死別や介護経験が死に対する態度にどのような影響を及ぼすのかを検討し、いのちに触れることの重要性を示すことを目的とした。

そして、その中で、ケアのもつ両面的側面の検討を行うことで、現在、ケア役割で葛藤している人にとって、また社会全体にとって、ケアすることの意義を改めて問い直せる結果を示すことが目的であった。

## 3. 研究の方法

本研究課題では以下のような研究方法で研究を遂行した。

まず、介護肯定感や負担感、ケアにおける性差の扱われ方等、ケアに関する国内外の研究動向を調査し、先行研究の成果とそれらの問題点を整理する理論的検討を行う。次に、身近な他者との死別と死別経験後の心の発達、介護後の心の発達についての検討を行う。そして、いのちに触れる経験(例:死別、介護等)が、人生に何をもたらすのか、またケアすることの意義について、研究結果をまとめ、広く周知する。

## 4. 研究成果

### (1) レビュー論文作成

死別や介護を中心に、喪失経験後のこころの発達に関して、国内外の論文を概観し、その中で喪失経験後のこころの発達がどのような文脈で研究され始め、現在どのように展開されているのかについて、研究動向を示しながら、今後の研究の方向性について考察を加えたレビュー論文を作成した。

その結果、ケア研究の対象者の大部分は女性であり、男性がケアをすることの意味というものが検討されている論文は皆無に等しいということ、ケアを行う際の心理を検討する際に、肯定感のみの視点、反対に負担感のみの視点からの検討では不十分であり、多面的で両面的な側面を包含した視点からの検討が必要であることが明らかになった。

### (2) 介護経験・死別経験による発達

上記(1)の結果をもとに質問紙を作成し、成人期以降を対象に調査を実施した。その結

果、身近な他者との死別によって、死別経験後「自己感覚の拡大」「死に対する恐怖」「死への関心」の3側面の変化が認められた。また経験した死別に対して、ショックが大きかった場合と、これまでの人生の中で、もっともストレスフルな出来事であると認識していた場合に、死別経験による人格的発達得点が有意に高かった。この調査結果から、死別経験者自身にとって、死別が人生を揺るがすほどの出来事であり、深い落ち込み、哀しみを経験したと認知した場合に、死別経験後、人格的発達といえるポジティブな発達が認められることが示唆された。

### (3) 学校教育においていのちの教育を行う意味

死別経験や介護経験は、成人期以降に遭遇するものではなく、年齢を問わず経験する可能性がある。しかしながら、死の外部化により、高齢者介護の現場や看取りの場面に遭遇することは少なくなっている。そのため、学校教育において、いのちの教育を行う必要性があると考えられるが、そのための予備的調査として、大学生を対象に、いのちの教育の経験の有無や必要性について等を調査した。

いのちの教育を受けた経験は38.5%という多くはない数値ではあったが、受けたものにとっては、感想の自由記述の分析(KJ法)から教育効果が認められた。

また、学校教育におけるいのちの教育の必要性については88.9%の対象者が必要であると回答し、学校教育におけるいのちの教育が必要であると感じているものが多いことが明らかになった。

いのちの教育を実施するのに適切な時期に関しては、対象者の多くが実際に受けた中学校、高等学校の時期よりも早い段階の小学校高学年を選択したものが最も多く、早い段階でのいのちの教育の実施を望んでいることが示された。

いのちの教育を実施する際に適切だと考えられる教科等に関しては、「道徳」、「総合的な学習の時間」、「特別活動」が多く、いのちの教育が実施された教科等と一致していた。教科に限定していえば、「保健体育」(体育を含む)、「生活」、「国語」、「家庭」(技術・家庭を含む)が多く選択されていた。

### (4) 介護経験・死別経験と死に対する態度との関連

死別経験や介護経験が死に対する態度にどのような影響を及ぼすのかに関して、青年期を対象に調査を実施した。

その結果、介護経験においては、介護を身近で見ること、また介護に参加することによって、介護について考え、それが死についても考えることにつながり、死をむやみに恐れ

たり、軽視したりといったことが軽減され、死を他人事ではなく、自己の問題として捉えるようになることが示唆された。

死別経験においては、死別経験の有無ではなく、対象者にとって、その人との死別がどれほど重要なものであったのかといった死別の内容との関連が認められた。

### (5) 身近な他者を介護することの意味

身近な他者を介護する経験が、成人期以降の女性にどのような影響を及ぼすのかについて明らかにするために、現職の女性教員を対象にキャリア発達の視点からの検討を行った。

その結果、結婚時や出産・育児期と比較して、介護をすることになった場合は離職を考える割合が多いことが明らかになった。また人生の節目に関しては、身近な他者を介護した経験、そしてその方との死別経験が多くあがっており、それにより、人格的に成長・発達したと感ずるといふ記述が多く認められた。

以上、生涯発達の視点から、介護や死別経験が個の発達にどのような影響をおよぼすのかについて検討を行った。

愛する人を喪う死別経験、身近な他者の介護をしながら老いを目の当たりにし看取りという経験は、やはり耐え難い経験である。その否定的な側面を十分に認め、それぞれの経験には多様性があること、そして一人の同じ人間であっても、時間や環境、当事者の心身の健康状態等によって、喪失経験後の受け止め方に変化が生じるということを理解しなければいけないことが示された。その上で、介護や死の看取りを経験することが、我々に生きるということを教えてくれると同時に、他者の危機を支えることで、自己の心にも成熟をもたらす可能性があるということを心に留めておく必要性を痛感した。

今後は、身近な他者との死別や介護といった喪失経験後の心の変化のプロセスについて解明できればと考えている。

従来のように獲得だけを目指し、「個」のみを重視した生き方では、現代社会は生き抜けない。死を看取る経験や介護をするといったような他者を支え、「ケアする」ということは、今後ますます重要になる。しかしながら、他者を支え、「ケアする」ことは容易なことではなく、ケア役割を担うといった「関係性にもとづくアイデンティティ」が、「個としてのアイデンティティ」との間に葛藤をもたらすことも少なくはない。それはまさに成人期の危機であろうが、「個」と「関係性」がどのように影響を及ぼし合うのか、また両者を統合、発達させるにはどのような要因が関連しているのかを解明していくことも今

後の重要な課題である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 渡邊照美 家庭科教師のキャリア発達－職業アイデンティティに関連する要因の検討－, 日本家政学会誌, 査読有, 61巻3号, 2010, 155-168
- ② 渡邊照美 学校教育における「いのちの教育」に関する予備的調査－家庭科教育での実施の可能性を探るために－, 暮らしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要, 査読無, 42巻2号, 2009, 113-128
- ③ 渡邊照美 喪失経験後のこころの発達に関する研究動向－生涯発達の視点に立って－, 暮らしき作陽大学・作陽短期大学研究紀要, 査読無, 41巻1号, 2008, 33-52

[学会発表] (計3件)

- ① 渡邊照美 学校教育におけるいのちの教育の必要性－大学生の意識調査から－, 日本発達心理学会第20回大会, 平成21年3月23日, 東京(日本女子大学)
- ② 渡邊照美 青年期における死に対する態度と関連要因の検討－介護・死別経験の視点から－, 日本青年心理学会第16回大会, 平成20年11月9日, 神奈川(横浜国立大学)
- ③ 渡邊照美 大学生にとって身近な他者と死別することの意味, 日本発達心理学会第19回大会, 平成20年3月20日, 大阪(追手門学院大学)

[図書] (計1件)

- ① 渡邊照美 ナカニシヤ出版, 成人発達臨床心理学－個と関係性からライフサイクルを観る－ 第5章家族の発達と危機 第5節 老親・配偶者の介護と看取り, 2010, 212-226, 分担執筆(岡本祐子編著)

[その他] (計2件)

- ① 渡邊照美 ケアすることとこころの発達, 平成20年度岡山県生涯学習大学講座[生活と福祉]講演, 平成20年9月28日, 岡山(暮らしき作陽大学)
- ② 渡邊照美 喪失経験後のポジティブな心理的発達: 普遍性と個別性に焦点を当てて, 日本発達心理学会第19回大会ラウンドテーブル, 平成20年3月19日, 大阪(追手門学院大学)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

渡邊 照美 (WATANABE TERUMI)

暮らしき作陽大学・子ども教育学部・講師

研究者番号: 60441466

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし